

団体名	竹原市	所属	市民健康課	他団体等との連携	地域住民
連絡先	健康対策係 (0846)22-7157				

取組事例名	竹原市食育推進行動計画策定～食育プロジェクト事業～	取組期間	平成24年度～平成29年度
--------------	---------------------------	-------------	---------------

取組の概要 ～ 住民参画による食育計画策定とプロジェクト事業の実践

食育の実践には、市民一人ひとりが自らの意志で食育に取り組むこと、地域・関係団体・企業・行政等、多様な主体の参画により推進することが重要となる。そこで、計画策定後も引き続いて、主体的に食育プロジェクト事業に取り組む担い手となってもらえるよう、計画策定時から住民や関係者等が協働し、連携した取組を行った。

取組の背景 ～ 竹原らしい食育推進計画

国の第2次食育推進基本計画の「周知から実践へ」をコンセプトに、竹原らしい食育推進計画を策定することとした。従前どおりに行政主導で策定し市民に周知しただけでは、竹原市総合計画の基本目標の一つである「みんなでつくる竹原の魅力」のキーワードとしている「協働」の具現化につながらないことから、市民の参画を視野に入れた計画作りを行う必要性があった。

取組のねらい ～ 市民参画・協働による食育の推進

市民の参画を得て計画策定し、その後食育事業のシンボルとなる5つのプロジェクト事業を市民、各種団体、住民自治組織、行政等の協働で進める。

また、そうした食育推進事業の実践を通じて、食に関する様々な取組の活性化を図る。

取組の具体的内容 ～ ワークショップを通じた協働による計画策定と実践

住民参加のワークショップで竹原市食育推進行動計画を策定し、計画策定後、実践型ネットワーク組織である「たけはら食育未来会議」を設置し、ワークショップに参加した市民が中心となって竹原らしさを生かした食育を推進する。

(1) 計画策定（平成24年度）

食育ワークショップ（全5回）で幅広く市民、関係者等の意見を取り入れ、計画に反映させた。

- ・第1回（竹原の「食」こんなだったらいいな♪～みんなで夢を語り合おう！～）

食育についての理解を深め、食育についての夢や願いを共有し、みんなで計画を作るという士気を高めた。

- ・第2回（現在の竹原の食育は？～伝統料理や地域行事など出し合ってみよう！～）

食育推進のキーワードと基本目標の整理をし、基本目標別のグループで食育の現状を話し合い、結果をツアー形式で発表した。

- ・第3回（竹原の守りたい食・創りたい食～食育計画の目標づくり～）

基本目標別のグループに分かれて竹原市の食の現状を調査した市民アンケート調査の結果を参考に、食の現状について話し合い、課題を抽出し、課題ごとの方策を考え、ツアー形式でアイデアの交流を図った。

- ・第4回（こんな食育活動できたらいいな！～みんなで取り組む食育活動のアイデア出し～）

食育事業のシンボルとなるプロジェクト事業をつくり、計画のキャッチコピーを考えた。ワークショップで出た意見を集約し、計画書に盛り込んだ。

- ・第5回（さあ始めよう！みんなで食育推進！～計画を実践につなげるために～）

完成した計画書を説明し、計画の実践に向けたプロジェクト事業の模擬アイデアを出し合った。



(2) たけはら食育未来会議（プロジェクト事業：平成25年～平成29年度）

未来会議の会員である市民、関係者等による、5つのプロジェクト事業の実践を行うグループ会議が始まった。

- 〈事業名〉 ①たけはら「食の歳時記」調べ隊 ②田んぼと畑と海の学校
 ③健康の味方「3色レンジャー」物語 ④地域で「輪食和育」食べよう会
 ⑤我が家・我がまち料理コンテスト

取組を進めていく中での課題・問題点 ～ 行政内部の連携と市民周知の効果的な方策

- (1) 行政内で食育事業に関わっている課は、教育、健康、産業など多岐にわたっており、計画策定に必要な多様な主体をどのように把握し、どのような形で参加してもらうか。
- (2) プロジェクト事業の取組の中で、参加者の意見をどのように引き出し、長期間にわたり食育事業に主体的に取り組んでもらえる人材をどのように育てていくか。
- (3) 市民参画においては、幅広い年齢層への働きかけが難しく、食育に対し興味関心が高まるよう、市民に対して、どのように効果的な啓発活動を行うか。

創意工夫した点 ～ 連携と体制作り、ワークショップの進行、広報活動・情報発信

- (1) 行政内部の連携と体制作り
多様な分野にわたる食育推進計画を策定するため、平成22年度に行政内の関係6課（2室）による食育推進行動計画策定作業部会を立ち上げ、食育に関する各課の事業内容の情報交換や食育研修会を行い、作業部会員として共に取り組んでいく体制の整備を行った。
- (2) 食育ワークショップの進行
ワークショップで、計画づくりに一人ひとりの意見を反映させるには、食について遠慮なく語り合える関係づくりが必要であった。全体のまとめ役でもあるファシリテータにより、アイスブレイクの手法で会を楽しむ雰囲気作りが行われ、人の意見を批判しないことや何を言ってもよいルールの中で、全体を通しての会が進められた。
グループワークについては、事前にファシリテータから各グループの進行役である食育作業部会員へのレクチャーがあり、進行や会の進め方について内容の共有を行った。
- (3) 市民への広報活動・情報発信
行政の策定する計画に対する市民意見の聴取や情報発信は、HP掲載だけの対応になりがちであるが、行政、市民、企業がそれぞれの役割を理解し、実践行動への実効性を高める観点からも、広報誌をはじめ、ケーブルテレビなどを利用するとともに、ワークショップの内容については、「ワークショップ通信」を作成、発信することでワークショップに参加していない方への情報発信、参画の呼び掛けを行った。

取組の成果（効果） ～ 庁舎内、市民との連携

- (1) 庁舎内連携 関係団体等への食育ワークショップへの参加の声かけは、事務局と各担当課が協力して行った。また、5つのプロジェクト事業は担当課の作業部会員が主体となり活動を始めた。
- (2) 市民との連携
ア 活発なワークショップの実現 20代から70代までの幅広い年齢層の方々による、毎回40人以上参加したワークショップでは、参加者から「改めて食について考えることができ楽しかった」「同じ思いの人がこんなにたくさんいると知り、何かできるだろうと思った」「話してみると意外にみんな同じ方向を向いていて、思いが重なっていることが多いと感じた」「思い切って口に出すことで、現実味が出てくるようだ」「違う目標でも、アイデアが重なり一つの活動が様々な効果をもたらすことが実感できた」などの意見が聞かれ、会を重ねるごとに活発なグループワークになった。
慣れないながらもワークショップの進行役を作業部会員が担当したことで、会の運営方法について学ぶことができ、プロジェクト事業の運営に生かすことができた。
イ 計画の推進役 計画作りを住民参加のワークショップで始め、個人・行政・企業等の各主体が協働で取り組むべき課題を話し合い、計画書に盛り込んだことで、参加者の満足度や実践意欲を高めることができ、計画策定後にはワークショップの参加者が「たけはら食育未来会議（計画推進組織）」の会員の中心となり、市民参加・参画で実践を行う5つのプロジェクト事業の強力な推進役となっている。（7月末現在47名）
この「たけはら食育未来会議」が、6月に普及啓発の観点から、「たけはら食育だより」として、竹原市の子どもたちの考えた朝ごはんメニューを紹介するなど、着実に協働の理念に基づく取組を進めている。

今後の展開 ～ 新たな未来会議登録者の発掘や主体的に取り組む会員の育成

5つのプロジェクト事業は、主担当課が中心となって進めていくが、プロジェクトによっては、連携して進めることで相乗効果がより高まるものもあるため、事務局が全体の動きを把握し、各プロジェクトの連携を図る。

プロジェクト事業の実践により、新たな未来会議登録者の発掘や主体的に取り組む会員の育成を行い、より多くの市民、関係団体の参画を得て事業が進むよう取り組む。

他団体へのアドバイス ～ 多様な団体へのきめ細かな参加呼びかけ

食育の推進にはより多くの市民参画が必要であるが、幅広い年齢層への働きかけが難しく、参加者の年齢構成や参加機関、関心のあるプロジェクトに対して偏りが見られることがあり、作業部会員等による多様な団体への参加のきめ細かな呼びかけを随時行っていくことが必要である。